

# 自閉性障害児Aの認知特性をふまえた学習指導方法に関する研究

弘前大学教育学部附属養護学校 外崎 毅

Key words:K-ABC WISC-III 認知特性 長所活用 教科別の指導

## I はじめに

平成11年の学習指導要領の改訂に盛り込まれた個別の指導計画の作成義務化以来、一人一人の教育的ニーズに応じた指導をきめ細かく行うためのさまざまな取り組みがされてきた。そして、その流れのなかで「教育的ニーズ」を的確に把握するために心理アセスメントを利用することはもはや一般化してきた感がある。

ここではWISC-IIIとK-ABCの二つの心理アセスメントをバッテリーとして児童の認知特性を明らかにしていく。そして国語・算数の学習場面に於いて認知特性に応じた教育は如何に組み立てられるか、ということに関して報告する。

## II 目的

対象児の認知特性を明らかにし、それを生かした指導方法をとることにより、特に言語的な能力の発達を促すとともに、効果的な支援の方略を開発することを目的とする。

## III 方法

### 1 対象

自閉的傾向の小学部男子児童(4学年)。日常生活動作や日常的な会話は問題なく、小学校2年生程度の漢字の読み書き、九九の暗唱などができる。グループの中で学習をリードしていける存在。

ただし、特に読み書きに於いて、例えば「～していました」を「～でした」と読む、「失礼しました」を「失礼“に”しました」と話す、濁点を抜いた筆記をする、などの特徴が観察された。

### 2 アセスメントの実施

アセスメントは対象児の実態を考慮して以下の4種を選定し、実施した。

- ・ KIDS TYPE T 乳幼児発達検査スケール
- ・ 新版 S-M 社会生活能力検査
- ・ K-ABC 心理・教育アセスメントバッテリー
- ・ WISC-III 知能検査

### 3 支援仮説の立案および実践

得意な部分を活用することで課題遂行をスムーズに行なえるようにするという視点からの「支援仮説a(長所活用)」, 苦手な部分のスキルを高めて行こうという視点からの「支援仮説b」の二つを立案する。

### 4 支援仮説の検証

支援仮説aに関しては生活課題に関する実験(ABA デザイン)を行ない、有効性を検証する。また、支援仮説bに関しては学習前後の比較検討を行う。

## IV 結果

### 1 アセスメントから

KIDS TYPE T からは理解言語・概念>表出言語, という特徴から表出がボトルネックとなって社会性の発達を妨げていることが推測された。同様に新版 S-M 社会生活能力検査からは他項目に比較して意思交換が有意に落ち込んでいることが観察された。(Table 1,2)

K-ABC からは認知処理尺度が  $77 \pm 7$  ということから養護学校在籍児童としては高い認知をもつことがわかった。また, 継次処理<同時処理 (有意差: 1%) であり, 下位検査間で共有される強い能力として抽象的・刺激に対する視知覚 (図形-記号), 弱い能力として聴覚に関する事項が列挙することから, 視覚優位・同時処理優位の認知スタイルであることがわかった。(Table 3)

WISC-III からは FIQ:76 (72-83: 90%信頼区間) であることから境界児程度の知能をもつことがわかった。PIQ>VIQ (有意差: 5%) であり, 群指数は PO>VC, FD, PS であることから, 操作的・空間的な情報の把握・処理が得意, 聴覚的な処理・意味付けしにくい視覚的な記憶が苦手という傾向が読み取れる。

Table 1) KIDS TYPE T 乳幼児発達検査スケール

運動	操作	理言	表言	概念	対子社	対成社	しつけ	食事
51	54	5:10	4:0	5:5	4:1	4:10	4:8	2:6

Table 2) 新版 S-M 社会生活能力検査

身辺自立	移動	作業	意志交換	集団参加	自己統制
50	6:6	10:2	3:9	6:0	6:10

Table 3) K-ABC 心理・教育アセスメントバッテリー

継次処理	同時処理	認知処理	習得度
$56 \pm 9$	$97 \pm 8$	$77 \pm 7$	$76 \pm 5$
下位検査間で共有される強い能力と影響因			
◎分析能力 ◎抽象的・刺激に対する視知覚 (図形-記号)			
下位検査間で共有される弱い能力と影響因			
◎短期記憶 (聴覚) ◎言語理解 (聴覚)			
<影響因> ◎不安 ◎注意の範囲/被転導性 ◎集中力			

Table 4) WISC-III 知能検査

全検査 IQ	言語性 IQ	動作性 IQ	言語理解	知覚・藤堂	注意・記憶	処理速度
76	70	89	70	93	76	66

### 2 支援仮説の立案

WISC-III と K-ABC は相互に結果を裏付ける関係にあり, 本児の認知スタイルは視覚優位, 同時処理優位であることがわかった。ただし, 相対的に弱いとはいえ聴覚的にも十分な力をもっていることが窺え, 将来の生活を考えると表出言語を伸ばしていくことで社会性を育てていくという考え方も捨てがたい。そこで以下のように二つの場面に分けて支援を行っていく方法を考えた。

<支援仮説 a>課題遂行場面では視覚的・操作的な方法を取り, 記憶は体験と結びつける。

<支援仮説 b>聴覚的コミュニケーション(そのもの)を学習する場面を設ける。

### 3 支援の実際

支援仮説に基づいて約10か月間、様々な形で指導を継続したが、代表的なものをいくつか列記する。

### (1) 支援仮説aについて

#### ① 朝の会の係活動でのチェックシートの活用

対象児の所属する学級では、朝の会の一部に係活動の時間を設け、自主的に活動を行なうことになっている。しかし、しばしば次の活動に移行できなかつたり、時間がかかつたりしていた。

そこで、活動行程を示したチェックシート(fig.1)を作成して本人がチェックしながら活動できるように工夫したところ、自主的に淡々と活動できるようになり、係活動後の課題学習の時間を十分に確保できるようになった。

#### ② おとまり遠足の感想文を書こう

アセスメント結果から明らかな通り、本児にとって文章を書くことは苦手な活動である。長期休業中の日記では20文字程度で終わることも多い。

そこで、おとまり遠足（宿泊学習）の作文を書くにあたっては以下の方法をとった。時系列を無視して気になった写真からコメントを記入し、コメントを推敲した後、時系列で整理して清書する。という方法をとった。

なおコメントには「そのとき僕はどう思ったか」という観点を盛り込み、できるだけ記入するよう言葉がけをした。そうしたところ約300字の作文を時系列に添って書くことができた。

### (2) 支援仮説bについて

#### ① きいて、おぼえて、かいてみよう

聴覚刺激のみで正確に単語を綴ること、聴覚記憶の保持を狙いとして、以下の学習を設定した。

○ 質問を先に教えておく→単文（100～200字程度）を読みきかせる→質問

をする（答えは10字以内の単語）→答えをノートに書く→発表する（読む）

質問を先に教えることで、単文のどの部分に注意を向ければよいかを理解させることにより、会話の要旨をつかむ力を養うこともねらっている。

#### ② きいて、かいて、よんでみよう

①より綴り方に重点をおいた学習である。

○ 単語（単文）を聞く→聞いた単語をノートに書く→自分の書いたものを読む

→訂正する→隣の人に読んでもらう

自己フィードバックさせることにより、訂正の機会を与え、それでも気づかないものに関しては他児の読む音により間違いに気づくように仕向けた学習である。

## 4 仮説の検証

### (1) 支援仮説aに関する妥当性に関する実験

チェックシートを利用した支援の妥当性に関して、以下の通り実験を行なった。

対象児は下着（シャツ）のはみ出しという生活上の課題を抱えている。口頭での注意はあまり効果的ではなく、一旦しまい込んでも維持が難しく、たびたび指

Fig.1)朝の会チェックシート

摘されることで反抗的な態度になってしまうこともある。

そこで、シャツをしまう（ズボンに入っている）ことを標的行動として、ABA デザインで実験を行なった。介入としてチェックシートを利用し、休み時間にシャツが入っていれば○（+1）として自己記入する形式をとった。baseline は1週間、介入1週間、その後、標的行動の生起率がほぼ0になるまで観察を続けた。

その結果、baseline でほぼ0であった生起率が介入後ただちに100%になった。その後、生起率は緩やかに減少し約1か月にほぼ0%に戻った。(Fig.2)

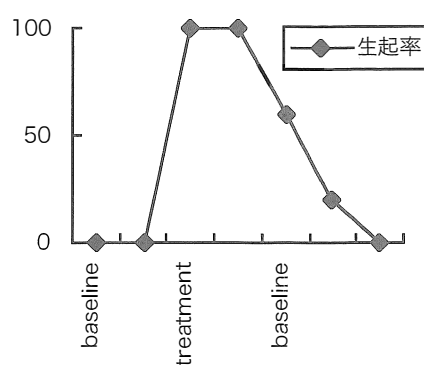


Fig.2)シャツが入っている頻度の推移

## (2) 支援仮説bに関して文字綴りの比較

約7か月後の聴覚のみによる単語の綴りの比較を行なった。顕著であった拗音、促音、濁音、半濁音を含む単語のいくつかを書き取らせたところ、「スパゲッーキ→スパゲティ」、「パイナプル→パイナップル」など、正確性の向上が観察された。

## V 考察

### 1 まとめ

#### (1)支援仮説aに関して

チェックシートの有効性の実験結果から、課題遂行のためのチェックシートの有効性が確認された。

また、「叱られてする」のではなく自主的な行動を促す支援ツールの利用は、対象児の情緒的な安定に効果的な作用を及ぼした。

#### (2)支援仮説bに関して

聴覚のみを手がかりにした書き取りを行なった場合に綴りの正確性が向上したことが確認された。

### 2 今後の課題

対象児の今後の生活を考えたときに、より広範囲にわたる支援ツールの開発が望まれる。「トークンシステムにおける家庭との連携」「ポイントカード制」をキーワードに、より簡便で総合的なものの可能性を模索したい。また、言語表記の正確性に関しては定量的な検証の必要性があり、今後の課題としたい。

## 文献

- ・ 上野一彦，服部美佳子，海津亜希子(2005)軽度発達障害の心理アセスメント－ISC-Ⅲの上手な利用と事例，日本文化科学社
- ・ 藤田和弘，前川久男，大六一志，上野一彦，石隈利紀(2005)WISC-Ⅲアセスメント事例集－理論と実際，日本文化科学社
- ・ 藤田和弘，熊谷恵子，青山真二(1998)長所活用型指導で子どもが変わる－認知処理様式を生かす国語・算数・作業学習の指導方略，図書文化社
- ・ 熊谷恵子，青山真二，藤田和弘 (2000)長所活用型指導で子どもが変わる<Part2>－国語・算数・日常生活のつまずきの指導，図書文化社